様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３５４８

研究課題名（和文）中国市民と朝鮮戦争に関する研究――「毛沢東の朝鮮戦争」の陰翳から

研究課題名（英文）On the Chinese People's Response to the Korean War

研究代表者
陳　肇斌（Chen, Zhaobin）

東京都立大学・法学政治学研究科・教授

研究者番号：４０３０１１３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は当初の計画通り、朝鮮戦争に対する中国市民の反応を明らかにし、8編の独立した論文を雑誌に公表した。さらに最終年度において、それらの成果を以下のような一冊の研究書として刊行した。
　陳肇斌（単著）『中国市民の朝鮮戦争――海外派兵をめぐる諸問題』（岩波書店、2020年10月）４００頁（368頁+）。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は、「中国と朝鮮戦争」の研究それ自体に寄与し、それにとどまらず今日の東アジアにおける「戦争と平和」の問題を考える重要な手がかりとなった。

研究成果の概要（英文）：CHEN Zhaobin, The Decisive Year, 1950: The Chinese People's Response to the War against the United States, IWANAMI Shoten, 2020.

研究分野：東アジア政治、日本政治外交史

キーワード：戦争と平和　海外派兵　集団的自衛権　朝鮮戦争　中国市民　後方支援　原爆（核兵器）　東アジア政治

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国の朝鮮参戦について学界では、これまで長い間、主としてその政策決定、いわば「毛沢東の朝鮮戦争」のように、毛個人とそれを中心とする中国共産党指導部の政策決定にもっぱら焦点が当てられてきた。従来の研究の変化を大まかに言えば、新聞、文献資料を使い、東西両陣営の冷戦の現実を反映してイデオロギー要因を重視した初期の研究から始まり、中国の改革開放を受けて一九八〇年代に公開された中国側の一次資料や関係者の回顧録、取材記事に基づき、中国の安全保障など国家利益の観点から考察されるようになった。その後、冷戦の終結によって旧ソ連側の一次資料への接近が可能となり、中ソ関係や中朝関係の側面から実証的に照射されるようになった。

このように資料は豊富になり、研究もかなりの程度までに深化している。しかし、研究の基本的な視座は、相変わらず毛沢東ら政府当局者に限定され、それ以外の一般市民の動向は、ほとんど議論の俎上に上っていない。権力者に研究の焦点を据えれば、市民は当然、政府の政策が貫徹される際に誘導されるべき対象として位置づけられるほかなく、彼らの反応は基本的に「親米・恐米」感情としてか、もしくは参戦を支持する大勢順応的な姿勢として叙述されるにとどまり、それ以上に多面的な具体像をあきらかにする必要もなかった。

２．研究の目的

一九五〇年六月に勃発した朝鮮戦争は現代中国にとって、重要な影響をもたらしかねない「周辺事態」であった。それに「海外派兵」すべきかどうかということを含めて、戦争と平和に関するさまざまな問題が急浮上した。同盟国に利用されて戦争に巻き込まれることにならないか。相手は本当に自分たちの「敵」なのか。自由や生活は参戦への派兵によって圧迫されないか。みずからはどのような姿勢でそれに関わるべきか。海外派兵に付随するこれらの問題について、中国市民はどのように考えていたのか。この設問に答えることが、本書の目的である。

３．研究の方法

本書は歴史学、政治学、社会学、心理学、宗教学等他分野の手法を駆使した。具体的な視点としては以下の通りである。朝鮮戦争当時、中国の市民は、最高権力者であった毛沢東によって政策決定の過程からその存在が一度捨象され、その後、毛沢東らに焦点を当てた研究者によって再度、歴史からその存在が捨象されたと言える。しかし市民に焦点を当てれば、それまで「親米・恐米」という記号でしか捉えられなかった感情や意見、行動はより具体的に観察され、平和を希求する非（避）戦・不戦・厭戦・反戦感情の表現として理解されることが可能となる。長年にわたる内外戦争を経てようやく平和が訪れた当時の時代背景を考えれば、このような位置づけ方がより自然と考えられる。

４．研究成果

本研究は当初の計画通り、朝鮮戦争に対する中国市民の反応を明らかにし、8 編の独立した論文を雑誌に公表した。さらに最終年度において、それらの成果を以下のような一冊の研究書として刊行した。

陳肇斌（単著）『中国市民の朝鮮戦争――海外派兵をめぐる諸問題』（岩波書店、2020 年 10 月）４００頁（368 頁+）。

全七章で一つの全体として有機的に構成した本書の主題は以下のとおりである。それは、古今東西を問わず、同盟国または準同盟国からの要請により、実力組織を海外に派遣する問題が提起されれば、国内の政治・経済・社会・市民生活に重大な影響を与える一連の問題群が発生

するということである。つまり、集団的自衛権行使の当否、緊急事態に乗じた個人の自由・権利への制限と侵害、防衛力の増強による平和産業や市民生活への圧迫、徴兵と死生の問題などである。この時期の中国市民にとっても例外ではなく、中ソ同盟条約があるなかで、同様に苦慮せざるをえない深刻な問題ばかりであった。考察の焦点を権力者ではなく一般市民に当ててはじめて、これまで看過されてきたこれらの問題に接近できたのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 陳肇斌	４．巻 第60巻
２．論文標題 中国軍将兵と朝鮮戦争――対米感情・復員・脱走を中心に――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 法学会雑誌	６．最初と最後の頁 279～230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 陳　肇斌	４．巻 第59巻第２号
２．論文標題 徐光耀と朝鮮戦争――職業観・死生観を中心に――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 法学会雑誌	６．最初と最後の頁 291-330
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 陳　肇斌	４．巻 58巻1号
２．論文標題 中国の労働者、農家と朝鮮戦争――海外派兵・後方支援・政権交代――	５．発行年 2017年
３．雑誌名 法学会雑誌	６．最初と最後の頁 338－400
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 陳　肇斌	４．巻 58巻2号
２．論文標題 朝鮮における戦局の転換と中国市民	５．発行年 2018年
３．雑誌名 法学会雑誌	６．最初と最後の頁 328-382
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 陳肇斌	4．巻 61巻1号
2．論文標題 中国軍将兵と朝鮮戦争（続き）――良心的兵役拒否を中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 法学会雑誌	6．最初と最後の頁 176-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 陳肇斌	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 400
3．書名 中国市民の朝鮮戦争――海外派兵をめぐる諸問題	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 近代の徴兵制に関する日中ワークショップ	開催年 2017年～2017年

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関